

ヨナ書 2 章「救いは主のもの」

- 2:1 ヨナは魚の腹の中から、彼の神、【主】に祈って、  
2:2 言った。「私が苦しみの中から【主】にお願いすると、主は答えてくださいました。私がよみの腹の中から叫ぶと、あなたは私の声を聞いてくださいました。  
2:3 あなたは私を海の真ん中の深みに投げ込まれました。潮の流れが私を囲み、あなたの波と大波がみな、私の上を越えて行きました。  
2:4 私は言った。『私はあなたの目の前から追われました。しかし、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです』と。  
2:5 水は、私ののどを絞めつけ、深淵は私を取り囲み、海草は私の頭からみつきました。  
2:6 私は山々の根元まで下り、地のかんぬきが、いつまでも私の上にあります。しかし、私の神、【主】よ。あなたは私のいのちを穴から引き上げてくださいました。  
2:7 私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は【主】を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。  
2:8 むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。  
2:9 しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ、私の誓いを果たしましょう。救いは主のものです。」  
2:10 【主】は、魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた。

はじめに

もし聖書を一言で言うとしたら、何でしょう。良い道德の教え、心を動かす物語、それとも、イスラエルの伝説と神話、歴史に残る神の業の話でしょうか。実は、この問いに対する答えから、神との関係を私たちがどのようにとらえているかがわかります。2 章はヨナの祈りですが、この中に重要な言葉があります。その言葉は、聖書全体を一言に凝縮したものだといふ歴史上の多くの神学者が考える内容です。それが、「救いは主のもの」です。ヨナは海に投げ込まれ、大きな魚に飲み込まれました。その後、ヨナは祈ります。その祈りは、私たちが学ぶべき重要な要素を明らかにします。私たちがヨナと同じ心境になって賛美し、平安を得るために、必要な要素です。この教えを自分のものにすれば、聖書全体を理解する秘訣を見いだしたことになります。けれども、ヨナはどのようにしてそれほど深い理解に達したのでしょうか。それにはまず、深みに落ちなくてはなりません。今朝は、私たちがヨナとともに深みに落ちる旅に出ます。わがままな預言者を海の深みへと連れて行った大きな魚を追いましょ。ヨナが見つけた神の恵みという宝を、私たちが見つけることができるでしょうか。

神の恵みを探す旅路では、次の 3 つの事柄を学びます。私たちはさばかれて当然の者であること、私たちは自分自身を救えないこと、そして、救いは主のものであることです。

- I. まずここで学ぶのは、**私たちはさばかれて当然の者だ**ということです。(3-4 節前半)
  - a. 3 節から 4 節の前半にかけて「あなた」という単語が繰り返されています。「あなたは私を海の真ん中の深みに投げ込まれ…あなたの波と大波が…」ヨナを海に投げ込んだのは水夫たちでしたが、彼らはヨナに対する神のみこころを知らずに成就していたのです。突き詰めるなら、ヨナが海に投げ込まれたのは、神のせいです。

- i. 私は今、マサチューセッツ州で海の近くに住んでいます。また、島国である英国の出身ですから、海は常に身近な存在です。英国の愛国歌にも、「ブリタニア！ 大海原を統治せよ」という一節があります。ですから、夏は海水浴に行くのが好きです。とても気持ちがよいです。日本も海に囲まれた国ですから、古代人が海をそれほど恐れるのは少し大げさなように思えるかもしれません。けれども、イスラエル人は航海に慣れた国民ではありませんでした。いわゆる「陸者（おかもの）」でした。イスラエル人の間では、海は死と混乱の世界として恐れられ、さばきの象徴となりました。すべてのイスラエル人が避けたいと考える闇の世界になぞらえられていました。聖書全体で海がさばきの比喩に使われているのは、そういうわけです。
  - ii. しかし、ここで素晴らしいことが起こっています。ヨナは、海、すなわち混乱やさばき自体が神のものであると認めました。ヨナはニネベの町にさばきが下ると告げるよう遣わされたのに、自分が告げるべき神のさばきを自ら体験していたのです。
- b. そして、この恐るべきさばきを自分は受けて当然だとヨナが気づいていたことが、彼の祈りからわかります。ヨナは預言者でした。神にすべてをささげ、神のことに完全に従っているはずの彼が、完全に自分の神を捨てたのです。ヨナは、不従順に対する公正な罰は神の御前から追放されることだとわかっていました。1章で、海に投げ込まれることに不思議なほど身を任せているのは、そういうわけでしょう。そう考えると、「神の御顔を避けて」逃げようというヨナの計画自体が皮肉ではありませんか。神には、罪人すべてに「わたしの御前から去れ」と命じる権利があることを、改めて考えさせられます。
- c. さて、「罪人」という単語には、いろんな固定観念がつきものです。「罪人」というと、犯罪を犯すことと結び付けがちです。そして、「私は犯罪者ではない。盗みも人殺しもしていないから大丈夫」と思うのです。けれども、罪はもっと広範囲で私たちに染みついたものです。スイッチでついたり消したりできるようなものではなく、油が漏れて、周囲の物をすべて汚染するような感じです。ここで皆さんにも、聖書が教える罪の考え方をわかっていたいただきたいと思います。そうすれば、自分たちが差し迫った状態にあることがわかるからです。
1. 罪の惨めさを正しく理解するひとつの方法が、8節に示されています。罪とは偶像礼拝です。自分のことを品行方正だと思っている人なら、さばきを受けるはずはないと思ってしまいがちです。罪というものを誤解しているからです。偶像礼拝とは、希望や価値、安全、そして生きる意義を神以外の何かに求めることです。つまり、関係性にかかわるものです。ですから、仕事や家庭、祖国など、良い物事であっても偶像になり得ます。ヨナがそうでした。ヨナは神以上に祖国を愛し、神がみことばを告げるように召された国の人々を憎むほどでした。偶像礼拝とは、良い被造物を何よりも一番にすることです。神はそれを黙って見ておられるでしょうか。被造物によって神の尊さがさげすまれ、私たちが神以下のものを人生の土台として据えることで神の御名を汚すのを傍観しておられるでしょうか。決してそんなことはありません。必ず報いを受けます。さばきは当然の結果です。

非常に耳の痛い話ですが、これが真理です。そして、神が恵みをもって差し出される自由の領域に足を踏み入れるためには聞かなければならない真理です。私たちは、必ずその自由にたどり着きますから、もう少し我慢してください。その前に、もうひとつの問題があります。私たちはさばきを受けて当然であるだけではありません。どんなに頑張っても、…

## II. 私たちは自分自身を救うことはできないのです。

- a. ヨナの祈りは、彼の置かれた絶望的な状況をつぶさに描いています。2 節は、ヨナが「よみの腹の中」にいると表現しました。これは、闇の世界です。ヘブル人の考える死者の世界で、そこから抜け出すことはできません。3 節には、ヨナが海の深みにいて、潮の流れに囲まれているとあります。5-6 節には、ヨナが山々の根元や深淵（被造物の中でもっとも深い神秘的な場所）まで下ったと語ります。そして、死の門が閉ざされたともあります。ヨナは、誰も手の届かない深い深いところへと沈んだのです。
  - i. ここでヨナが言おうとしていることがわかりますか。彼は、死んだも同然でした。助けはやってきません。この詩の大部分は、おぼれていく姿を表しています。さばかれて当然で、自分で自分を救うことができず、誰かのあわれみにすがるしかない状態は、おぼれて水の深みに押しつぶされるような感じだと教えてくれます。自分で自分を救えない、私たちの霊的状态を描写しています。
    1. これをうまく表現しているのが、海草がからみついたという部分です。最近、マサチューセッツの神学校の近くにある湖で泳いだときのことを思い出します。私は水泳が得意ですが、思いがけず海草の生えた場所に入ってしまうとたちまち危険な状態になります。海草の生えた場所にすっぽりと入ってしまって、方向感覚を失ってしまいました。上も下もわからないのです。パニックになって、とにかくその場から逃げようと必死に泳ぐのですが、もがけばもがくほど海草がからまってきます。幸い、少し落ち着いてからまった海草をはずすことができましたが、ヨナがここで語っていることがよくわかりました。私たちは、からみついた罪を自分で取り去ることはできないのです。
    2. 必死にもがけば、海草から逃れられると思いますが、実際には余計にからまって方向がわからなくなり、おぼれる危険性があります。善人になろう、神の赦しを自力で獲得しようという努力は、さらに罪を重ねるだけです。神に借りを作らせようとしていることだからです。霊的な負のスパイラルから自力で抜け出すことは決してできません。どこまですれば十分か、自分ではわからないからです。罪の重荷を背負って海底まで霊的に沈んでしまったようなものです。ヨナが自分で自分を助けることができないのと同じように、私たちも、自分自身を救う方法はありません。
  - b. さて、自力で窮地から脱出することはできないと繰り返し言っていますが、これは、日本でも米国でも世間の一般論に反する内容です。日本は敗戦後、焼け野原から見事な復興を遂げ、世界屈指の富裕国となりました。これは奇跡と呼ぶに足ることです。
    - i. けれども、これは日本人の頑張るという気質が成した業だと日本人の友人から聞いたことがあります。為せば成るという考え方です。そこには、

自らの道を切り開けるという高い誇りがあります。それは、日本人だけに言えることではありません。米国でも、プロテスタントの職業倫理感にこれと似たものがあります。頑張れば夢はかなうというものです。けれども、もっと大局的な視点から見ると、日本も米国も、経済は発展しましたが、私たちは救われてはいません。裕福になったかもしれませんが、その代償を考えてみてください。米国は今までにないほど分断が進み、社会は崩壊寸前です。日本も、社会的な基盤が崩れ、その影響に苦しんでいます。過労死があちこちで起こり、仕事の重圧が原因で離婚に至るケースもあります。結局、私たちは自分で自分を救うことはできないのです。

- c. けれども、そのような暗い展望の中に、励ましがあります。イスラエルの神がどのようなお方か、皆さんはご存知ですか。このお方はさばき主で、罪ある者を罰せずにおかれることはありません。けれども、自力で自分を救えない私たちは、神の恵みを受ける最有力候補なのです。
  - i. ヨナが祈りの中で、完全に希望が絶たれたとき、主が介入してくださいました。6節は、死の淵というどん底から神がヨナをひきあげてくださったと語ります。神はそういうお方です。ある注解者は次のように説明しました。「イスラエルの民をエジプトから導き出されたときから、無力な人々を導き出すのが神のもっとも特徴的な救いの行為である。」神は、希望を無くした人たちの叫びを幾度となく聞かれ、救ってこられました。あなたがどんなに絶望していても、神の恵みが届かないほどではありません。むしろ絶望は、恵みが注がれる前提条件です。

この祈りが描くのは、なんとも暗い情景です。私たちは自らの罪のせいでさばきを受けて当然であり、自分自身を救うことはできません。けれども、先ほどお話したように、この個所の随所には希望の光が見え隠れしていることにお気づきでしょうか。その希望の光が差すところに示されているのが…

### III. 救いは主のもの、という真理です。

- a. 8節には、翻訳のせいで少しわかりにくくなっている対比があります。「偶像」と訳された単語は、蒸気やかすみという意味がある「ヘベル」という単語から派生しています。伝道者の書で何度も用いられる「空(くう)」と訳されているのと同じ単語です。もうひとつ注目していただきたいのは、「恵み」と訳されたヘブル語の単語「ヘセド」です。これはとても特別な単語です。神が契約に忠実であられることを示す単語です。その約束を守られ、無条件にご自身の民を愛されることを意味します。そこに対比があるのがおわかりでしょうか。「ヘベル」と「ヘセド」の対比は次のように説明できます。神から離れたところで価値や重要性、生甲斐を与えると約束するものは何でも偶像ですが、偶像はむなしく、実現できないことまでも約束します。私たちが自分で自分を救えないように、偶像も私たちを救えません。一方、神は愛とあわれみを受けるに値しない者にも愛とあわれみを注がれるお方であると同時に、救う力をお持ちです。
  - i. ヨナは、自分のむなしさと無益さを多少は悟りました。そして、神があわれみに満ちたお方であることを思い出しました。偶像に頼っても、むなしさしか残りません。偶像自体がむなしい存在だからです。一方、神は私たちを驚きと愛と賛美で満たしてくださいます。

- b. その神の恵みは、エルサレムのある特別な場所に凝縮されています。この祈りの中にも二度登場します。それは、神の聖なる宮です。なぜヨナは、その場所について繰り返し語ったのでしょうか。宮の至聖所が、神の恵みをなによりも思い起こさせてくれる場所だからです。
- i. 宮の幕の向こうには、契約の箱があります。その契約の箱の上には、恵みの座とも呼ばれる贖いのふたがあります。これは、十戒を覆うふたです。イスラエルの民は十戒を守るように命じられ、しばしば破りました。同じ場所に、律法と恵みが共存していました。律法を記した石版の上に恵みの座が安置されているのは、驚くべきことです。この場所で、大祭司は年に一度、贖いの日に神ご自身にお会いし、いけにえの血をふりかけます。それは、イスラエルの民が神の律法を守れなかった罪を赦していただくためでした。神は救うことができになるだけでなく、救うことを望んでおられるという安心を与えてくれました。けれども、その安心と確信は、身代わりの死なしには与えられません。赦しとあわれみを確かに得るためには、動物が死んで血を流さなくてはなりませんでした。
  - ii. ここで皆さんは疑問に思っておられるのでしょうか。罪深い人間をさばかれる神が、罪深い人間に恵みを注がれることがあり得るだろうか、と。それは非常に良い質問です。実際、それが旧約聖書に一貫した疑問です。そして、神の子がエルサレム近郊の十字架にかけられるまで、答えられないままだった疑問です。私たちの罪を取り去るために、動物の血は十分ではありませんでした。神の御子の血だけが、全人類の罪を取り去るのに十分だったのです。
    1. 私たちには、ヨナにはなかった視点があります。それは十字架です。イエスは、神の御怒りの深淵まで落ちました。地のかんぬきイエスを閉じ込めました。私たちが経験する以上の深みへと落ちられたのです。イエスはさばきを受けるべき罪もなく、いつでもご自身を救うことができになったにもかかわらず、落ちることに甘んじられました。神の御怒りの波に打ち砕かれ、イエスのいのちは、尊い犠牲となりました。私たちの救いを保証し、放浪に終止符を打ち、神との関係を回復させるためです。

## まとめ

ヨナの祈りは、「救いは主のもので」という喜びの叫びで締めくくられています。救いは、主だけのものです。半分主のもので、半分私のもではありません。救いをもたらされるのは、完全に神の業です。私たちは救われる必要があるだけで、救いに貢献できるものは何もありません。これが福音です。慰めをもたらし、人を謙虚にさせる、うるわしい栄光の福音です。自分には神の恵みは必要ないと思っているなら、それほど素晴らしいとは思わないかもしれません。自分はどうしようもない人間だと思っても、神の愛はまだはっきりとはわからない、という人もいるかもしれません。自分は罪の深みに落ちていくばかりだと感じていますか。海草がからまって、どうしようもないと感じていませんか。もしそうなら、神に助けを求めましょう。あなたは救いをいただく最有力候補です。がんじがらめの状態でも、助けを求めて叫べます。神は、苦しみや試練を用いられる、ということをお出ししてください。それは、私たちをだめにするためではありません。私たちの殻を割り、神の恵みを受けるにふさわしい状態にするためです。恵みのもっとも素晴らしい奥義を学べるのは、たいていどん底にいる時だから

です。ヨナのように、恵みの座に目を向け、その意味を考えましょう。恵みの座は、恵みを受けるに値しない罪人のために死なれたイエスの死を象徴します。私たちは罪人ですから、さばきを受けて当然です。そして、自分自身を救う力はありません。けれども、神は私たちを救う力をお持ちで、救いたいと願ってくださるお方です。私たちは自分の想像以上にひどい状態ですが、自分が望む以上に愛されています。救いは主のものです。